

前福島県知事 佐藤栄佐久氏

特別寄稿

語る！

3



佐藤栄佐久氏 (郡山の自宅で)

中学
高校時代

すっかり常連となった聖光学院と一緒に、今年も、春の選抜高校野球「21世紀杯」として、いわきの海星高校が甲子園に出場することになり、我がことのように嬉しく思いました。

野球の応援行き 始末書

騒ぎの渦中ではどうしてる？

のラグビーのように、全国大会出場を決めた高校チームは、報告を兼ねて必ず知事を訪問してくれます。

私は激励のつもりで、本宮中から郡山二中に転校した時のエピソードを、選手の方々に話したものでした。

中学二年の三学期、私は郡山二中に転校しました。当時の私にとって、郡山二中の同級生はいかにも「街っ子」という感じで、みんな大人びて見え、何となく気後れを覚える存在でした。

新しくできた友人たちが、私に言うのです。「本宮はどうか知らないけど、郡山はね、一年生から英語・国など、主要科目は大学受験の参考書をやっている人が何人もいるよ」

大学受験の英語・数学・国語。中で……。私は青ざめる思いでした。

しかし、皆がやっているのであれば、私も追いつくしかない、と考え、その参考書の名前を覚えてもらい、早速買ってくる、辞書と首っぴきで必死の勉強を始めました。

どんなに必死でやっても一冊を終えるのに二、三カ月はかかりました。やっと終わつたと報告すると、「そんなことを真に受けたのか」と、皆でポット出の栄佐久君をかまったというわけでした。

後に友人になりましたが、確かに一人、二人そんなませた二年生がいたものでした。

全国大会に出場する選手たちに何故このエピソードをお話するかというと、皆さんがお見えになるのは、全国大会の二、三カ月前だからです。私自身の死に物狂いの二カ月のことを話して、これから二カ月、それこそ必死の練習をすれば、全国一も決して夢ではない、と伝えたかったのです。

んなに机を持って元の教室に戻ろう、先生が居なくても自分たちで勉強しようと言って、泣きながらみんなで机を持って、元の教室に戻ったことがあるんです。

この頃からあったのです。決してガキ大将でも、町一番の優等生というわけでもなかったのに、気がつくといつも大きな騒ぎの渦中にいる、という私はそのタイプだったのです。

|| 続く

*題字は、石川進さん(本誌「私の博物誌」執筆)

たのです。私は四組だったのですが、二、三日して、二組にいった生徒が私のところに来て、いじめられている、と訴えてきました。

小4に「反骨精神」

きつと、私自身、学校のやり方に釈然としないものがあったのだと思うのですが、それを聞いて私は、三組のみ



小学校のころは、「よく遊べ」で、イトコたちと一緒に、野球も楽しみました=写真上・前列中央。高校時代、仲間たちとスキーを楽しむ筆者=右。当時は、今のようなスキーウェアなどはありませんでした



著者プロフィール 佐藤 栄佐久 (さとう・えいさく)

1939(昭和14)年6月24日生まれ。福島県郡山出身。県立安積高校、東京大学法学部卒。青年会議所活動などを経て83年の第13回参議院選挙に自民党公認で出馬、当選。88年、参議院議員を辞職して同県知事選に出馬、以後、5期連続当選。

知事在職中は、教育、環境問題に尽力する一方、東京一極集中、道州制などについて否定、さらに、政府、電力会社が進めるプルサーマル計画の導入についても反対を唱えるなど、「戦う知事」として県民の人気を集めた。ところが、県発注のダム工事に伴う「汚職事件」に関与したとされる実弟の逮捕によって、県政を混乱させた責任をとり、2006年9月、5期目の任期途中で辞職。その後、自身も逮捕される。12年10月、最高裁は弁護側、検察側双方の上告を棄却、懲役2年・執行猶予4年の最高裁判決が確定した。

☆ ☆
*高裁の判決は、「有罪」とする前提がすべて崩れているにもかかわらず、「無形のわいろ」や「換金の利益」といった従来の法の概念にはない不思議な理論と論法で「有罪」とした。この結果、「罪自体が不明」とし、「冤罪」を指摘する声も大きい。

著書に、『知事抹殺一つくられた福島県汚職事件』などがある。現在は、全国各地で国の体制・体質、原発問題などについて講演活動を展開中。

美しい写真とともにおくる、いわきのしられざる歴史と文化。読み終えたあと、いつもの風景が違って見えてくるはずですよ。

写真/アクアマリンふくしまの夜景(撮影・赤沼博志)

オールカラーでおくる、まるごと1冊いわきの本
ムック版 いわき
◆オールカラー/158頁 定価/2,100円(税込)
歴史春秋社 TEL.0242(26)6567 FAX.0242(27)8110

大好評発売中!

3年全員野球場へ

今振り返ってみても、こういうやんちゃで楽しい仲間と共に、私は郡山二中から安積高校へと進んだのでした。私が生徒会長をやっていた三年生の夏、安高野球部が地元の開成山球場で試合を行うことになりました。学校がある日でしたので、応援は禁止というお達しです。

しかし、せっかく地元で試合をするのだから、生徒会長として私ひとり位は応援に行かなければ野球部も張り合いがないだろうと考えて、私は叱られるのを覚悟の上で、こっそり家から球場に応援に行くことにしました。ところが、その情報がどこからか流れて、当日は三年生全員が野球場のスタンドに集まったのです。困ったなと思いましたが、今さらどうしようもありません。声を限り応援するだけでしたが、勿論、結果は責任者として「始末書」となりました。それが生徒会長のサポータージュ事件とか、反骨の抗議活動とか後にいろいろ言われましたが、私としてはそんな立